JCG
愛します！ 守ります！ 日本の海

Japan Coast Guard Journal［海上保安庁情報誌］

かいほジャーナル

vol.47
2011 Summer

【特集】東日本大震災

海上保安庁
JAPAN COAST GUARD

平成23年3月12日　宮城県仙台市荒浜小学校で孤立者を救助する
仙台航空基地所属ヘリコプター「SH176 おおるり」

Japan Coast Guard Journal Vol.47

CONTENTS

グラビア

震災発生3週間後に漂流家屋上で犬を保護 …… 1
海上保安大学校・海上保安学校入学式 …… 1
東日本大震災における対応～福島原発から10km圏内を捜索～ …… 2
人材育成の国際的拠点を目指す～アジア海上保安初級幹部研修開講～ …… 2
ゴールデンウィークに安全推進活動 …… 2
練習船「こじま」、世界一周の遠洋航海へ …… 3

【特集】
東日本大震災 …… 4

NEWS FLASH …… 12

INFORMATION …… 裏表紙
大切な命!自分で守る～海上保安庁からのお願い～
海上保安大学校・海上保安学校採用試験

photo gravure 1 かいほ・フォトグラビア

震災発生3週間後に漂流家屋上で犬を保護

4月1日、宮城県気仙沼市本吉町末ノ埼の北、約1.8ｋｍの海上において、海上保安庁のヘリコプター「たんちょう」が瓦礫と共に漂流している家屋上に犬を発見。

ヘリコプターから特殊救難隊が降下し、漂流する家屋内の行方不明者を捜索するとともに家屋上に残された犬を巡視船「つがる」乗組員と協力し保護することに成功しました。

保護された犬は、巡視船により塩釜港へ搬送され、後日、無事飼い主のもとへ帰ることが出来ました。

photo gravure 2 かいほ・フォトグラビア

海上保安大学校・海上保安学校入学式

4月12日に海上保安大学校（広島県呉市）、4月13日には海上保安学校（京都府舞鶴市）において入学式が挙行されました。

海上保安大学校では新入学生41名（うち女子８名）・特修科研修生23名（うち女子１名）が、海上保安学校では180名（うち女子30名）の新入学生が、城野海上保安庁次長から「海上保安庁の旗印である「正義仁愛」の精神を心にしっかりと宿して欲しい」と訓示を受けました。

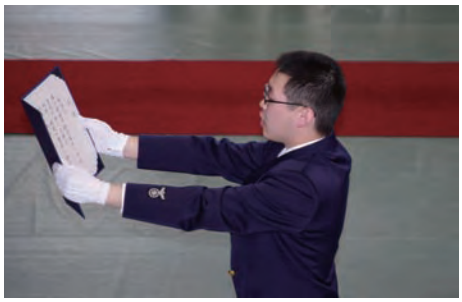


photo gravure 3 かいほ・フォトグラビア

東日本大震災における対応

～福島原発から10km圏内を捜索～

海上保安庁では、5月16日、25日、7月13日及び8月9日、福島県双葉郡波江町請戸漁港及び周辺海域（福島第一原子力発電所から10キロメートル以内）において行方不明者の捜索を行いました。同海域での捜索には放射線防護の装備が必要であるため、海上保安官は黄色や白色の防護服に身を包み行方不明者の捜索を実施しました。

なお、いずれの捜索においても、行方不明者の発見には至っていません。

photo gravure 4 かいほ・フォトグラビア

ゴールデンウィークに安全推進活動

海上保安庁では、4月29日から5月8日までの間、ゴールデンウィーク安全推進活動期間として、全国各地において定期巡回、訪船指導や海難防止講習会を実施しました。

期間中、プレジャーボート乗船者に見張りの励行や救命胴衣着用など海難防止を呼びかけたほか、レジャースポットにおいてもリーフレットを配布し、自己救命策　3つの基本（本紙 INFORMATION参照）について指導を行いました。

photo gravure 5
かいほ・フォトグラビア

人材育成の国際的拠点を目指す
～アジア海上保安初級幹部研修開講～

5月9日、海上保安庁は日本財団及び（財）海上保安協会と協力し、海上保安大学校（広島県呉市）において、アジア海上保安初級幹部研修を開始しました。本研修は、海上保安庁職員を含むアジア各国の海上保安機関の初級幹部を参加させ、幅広い知見と国際的な視野を持った人材育成を行うとともに、研修員の相互理解を通じて、アジア各国海上保安機関の連携強化を図ることを目的としており、将来的には海上保安大学校がアジアの海上保安機関の人材育成の国際的な拠点となることを目指しています。

photo gravure 6
かいほ・フォトグラビア

練習船「こじま」、世界一周の遠洋航海へ

5月9日、海上保安大学校（広島県呉市）の練習船「こじま」は、総日数95日、総航程約46,300キロメートルに及ぶ世界一周の遠洋航海のため呉を出港しました。この遠洋航海では、ホノルル、ニューヨーク、イスタンブール、シンガポールへ寄港し、各国の海上保安機関との交流の他、洋上では訓練・実習などを行い、実習生35名を乗せた「こじま」は、8月11日、無事帰港しました。

未曾有の大災害を引き起こした東北地方太平洋沖地震
3月11日の地震発生から半年が過ぎようとしている今も
被災の爪跡は深く刻まれたままだ
対策本部として指揮を執る第二管区海上保安本部では
現在も捜索活動の日々が続いている

取材・文／中島 敦（オンサイト）

大震災

東日本

地震発生と同時に立ち上がった対策本部。指揮の中心となる運用司令センターの様子。間の悪いことにこの時、本来対策本部となるべき部屋が改装中で機能せず、狭い運用司令センターに対策本部機能も詰め込まれた。

3.11 地震発生
――そのとき対策本部は？

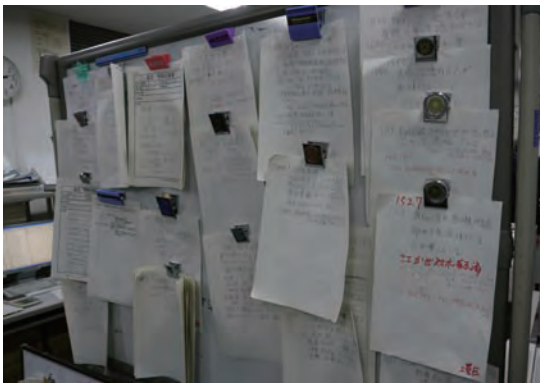
未曾有の災害に海上保安官達はどのように反応し、対処したのか？
東北の海を守る第二管区海上保安本部の動きを再現する

対策本部発動

3月11日午後2時46分、途方もない大地震が東北地方と関東北部を襲った。震源は三陸沖約130㎞、震源の深さは24㎞。マグニチュード9・0という観測史上最大級の大地震だった。激しい揺れは3分間も続き、沿岸部はもちろんのこと、内陸部にまで大きな被害を与えるものだった。

「ちょうど二日前の9日にも大きな地震がありましたが、その時とは揺れ方も全然違うし規模も違う。いよいよ宮城県沖地震が発生したのかと思いました」と地震発生当時のことを説明するのは、第二管区海上保安本部総務部の山内秀徳総務課長だ。「当然のことながらすぐに対策本部が立ち上がり、各部がマニュアルに従って対応を開始しました」

常々、30年以内に99パーセントの確率で発生すると予想されていた宮城県沖地震を警戒していたこともあり、山内課長のみならず、誰もがただちに宮城県沖地震の発生を疑った。今回の地震は宮城県沖地震に該当するかどうかの見解はわかれるところだが、大地震発生時のために用意されていたマニュアルは確実に機能を開始したことになる。具体的には、震度6以上の地震発生、あるいは大津波警報が発令された場合には、自動的に地震対策本部が立ち上がる。これは管理室を筆頭に経理補給業務室、船舶技術業務室、警備救難業務室、海洋情報業務室、交通業務室、そして情報通信業務室の以上7室から構成される。例外はあるが大まかには、各室毎に普段の業務がそのまま対策室となるイメージだ。また警備救難業務室のマニュアルには体制を整え、直ちに救助活動を開始する初動段階、主として生存者救助に重点を置く初期段階、そして行方不明者捜索、自治体からの要請による物資輸送等の活動を行う中期段階の3ステージが明示されている。



寄せられた情報はすべて紙にメモされホワイトボードに掲載。原始的な方法だが、電気を断たれた中で、全員がひと目で分かる情報共有の手段となった。

混乱の収束

とはいえ、対策本部が立ち上がれば後は粛々と対応、というわけにはいかなかった。何よりもまず停電により一部の通信と電源を失っていた。限られた非常用電源では、最低限の機器しか動かない。そこに118番通報を始め、一般回線や無線でも多数の救助要請が寄せられることになった。ここでライフラインの断絶と殺到した通報による混乱が発生した。

通常であれば出動は、寄せられた情報の確認を取ってから対応するのだが、それを行う手段も余力も一切ない。かといって寄せられた情報は、たとえ誤ったものであっても対応しないわけにはいかない。システムが動かない中、錯綜する情報を全員が正確に処理

津波発生時、庁舎7階から見た塩釜港。比較的津波被害は小さかったという塩釜地区だが庁舎の周囲まで冠水し、多数の車と船が被害を受けた。幸い庁舎とその駐車場は被害を免れた。

するために取られた方法は、もっともオーソドックスなメモ用紙だった。1件の情報を1枚のメモ用紙に記載してホワイトボードに貼る。救助や確認が完了した事案には『済み』と明記する。原始的な手法によってひととおり情報を把握できるようになったのは、11日深夜のことだったという。

一方、第二管区海上保安本部は災害対策本部という本来の機能とは別に、地元の一時避難所にもなっていた。地震発生直後から近隣の住民や水産加工業者、港湾関連の人々が続々と庁舎内へ避難することになった。当初、庁舎2階の大会議室と小会議室を避難所として予定していたが（想定は130名程度）、集まった人の数にはとても間に合わず、さらに、予想された津波の高さから上層階への避難が必要であったため、庁舎の3階から7階までの階段通路、各階の通路に住民を案内することになった。当日の天候がみぞれ混じりの雪ということもあり、備蓄していた毛布を提供したがこれも足りない。対応にあたった総務部谷田一夫人事課長は、「無我夢中で受け入れて、ある程度落ち着いたときはもう夜で周囲は真っ暗でした。それから初めて寒さ対策や夕食となり、その場その場で対応するしかありませんでした」とその時の様子を語る。

そもそも一時避難場所とは、非常時に暫定的に身の安全を確保する場所であり、その後に正規の避難所（この場合は塩釜第三小学校）が被災者を受け入れることになっている。ところが今回は正規避難所への退避完了が16日と、6日間にわたって被災者の受け入れが続いた。最終的には受け入れた被災住民はのべ1075名。職員用の備蓄食料や毛布をやりくりし、海上保安官達は高齢者のケアなど対応に追われた。何より、庁舎自体、電気、水道、通信といったライフラインが復旧しなかった。備蓄していた水があったことで飲料水に困らなかったのは唯一の救いだろう。

大規模災害に備えて

対策本部そのものが被害を受けたため初動時の混乱はあったものの、すぐに体制は整い本来の機能を取り戻していった。まず何よりも、全国の各管区から応援部隊が続々と集結した。船艇は54隻、航空機については21機が集まり救助活動に従事している。もちろん対策本部にも応援が駆けつけ、現場指示、後方支援にあたった。各県庁にはリエゾンと呼ばれる連絡要員が派遣され、自治体との連携を図る。地震発生時には巡視船『くりこま』に乗船中で津波の被害を受け、14日から運用司令センターで勤務した警備救難部救難課運用司令センターの中村朗所長は、「まず驚いたのが、この限られた海域にこれほど多くの巡視船と航空機が集まってるのかということ。つまり、それだけの大災害であり相応な対応が取られていたということです。この時点で先に述べたように50件近い事案に対応していたことも分かりましたし、リエゾンも配備されていたのでそちらからの情報に基づいて対応しました」と、初動の体制について語る。ただ、「次から次へと事案を示すペーパーが上がってくるので、ほとんど機械的に動いていたという記憶しかありません」という言葉から、間断なく発生する事案への対応に追われ続けていたことが伺い知れる。「それで良かったのか悪かったのか。でも、そうするしかなかったという気はしますね」

一方、当然ながらマニュアル外の対応もあった。沿岸一体は津波によって甚大な被害を受け、多くの方々が命を失っている。警察からは岩沼で200～300体、塩釜地区で100～200体、気仙沼で200体の遺体があると、膨大な数の遺体がそのままになっているとの情報が伝えられた。本来、通常であれば海上保安庁は遺体の収容と併せて検視、身元確認作業を行い、遺族や自治体などの引取人へ引き渡すまでが担当領域だが、それでは到底、捜索作業が進まない。警備救難部近藤俊一刑事課長は、行方不明者の捜索、収容を最優先とするため、警察、海上自衛隊と連携をとって、収容した遺体は、すべて警察に引継ぎ、警察が一括して検視を行うことで調整。各機関ができるだけのことを全力で行うべきとの判断から、管轄の枠を超えての対応が実現したのだ。

対策本部においてライフラインが復旧し、ようやく事態が落ち着きを見せたのはゴールデンウイークが明けてからだという。とはいえその後も捜索活動は継続されている。毎日巡視船艇や航空機による捜索が繰り返されているのだ。

山内総務課長は、いまだ現在進行形であるこの大震災を、将来のための教訓にすべきと語る。

「明治三陸地震、昭和三陸地震と、忘れかけていたことがまた起こった。今回の大震災は甚大な被害をもたらしましたが、同時に今後予想される東海地震、東南海地震、南海地震に対してどう備えるかという、ひとつの事例として捉えなければなりません。ですから関西地区や東海といった方面の方々にも、この震災を東北地方の遠いところで起こっているという感覚ではなく、自分達のこととして捉えていただければと思います」

想定していた大小会議室は満杯となり、一時避難に訪れた人々は廊下や階段踊り場に溢れることに。

被災

空港は波に飲まれ基地機能は停止した

仙台空港が津波に襲われ、瓦礫と一緒に多くの車や航空機が流される……
衝撃的なニュース映像は被災した仙台航空基地で撮影されたものだった

1元特殊救難隊員がガスボンベをLANケーブルで結束して作った手製いかだで格納庫から機材を搬出、被災者を救助。2また、空港駐車場から流されてきた駐車場の職員はカーテンを紐状にして救助した。3 4流れる瓦礫伝いに格納庫へ辿りつき、ゴムボートや物資を持ち帰ったのは南谷真也飛行士。水は背丈に迫る深さだったが、ロッククライミングの経験が発揮された。5非常時に大変役立ったというけん引車は職員が三日掛けて修復したもの。

仙台空港に隣接する仙台航空基地は、東北地方太平洋沖地震による津波の直撃を受けた。基地1階はほぼ水没し、流れ込んだ瓦礫が格納庫の壁を破る。何より、波に飲まれたヘリコプターや航空機が目の前を流れていく様は、職員の手によって記録映像として撮影され、ニュース映像としてテレビで広く伝えられた。災害時の拠点となるべき航空基地が被災地となった瞬間だった。

長い横揺れが発生したとき、田辺哲朗基地長は次長、整備長とミーティングの真っ最中だった。「このまま収まるのかと思っていたら急に揺れが大きくなり、ユッサユッサと、それからガガガガッと最後は身体を支えていないと立っていられないような揺れでした」

基地長は直ちに司令室へ移動し必要な対応を取った。地震発生時に飛行中だった機体はSH176が1機。エプロンには待機中のMH906が駐機しており、格納庫の中には同じく待機していたMA854とMA869が。そしてヘリコプターが4機（SH177と178、MH907とMH574、うち1機は宮城海上保安部所属）が同じく格納庫にあった。

基地長は直ちに飛行中のSH176に対して、仙台から塩釜地区沿岸の調査に向かうよう指示を出す。同時に待機していたMH906についてはヘリテレの機材を搭載させて、離陸準備して飛ぶよう指示を出した。もう1機、飛べる状態にあったSH177については、隣接する海上保安学校宮城分校のクルーで飛ばす手筈を整えた。どちらもヘリコプター。固定翼の航空機については、滑走路のチェックに時間を要したことと、管区外からの応援機が数機着陸するとの情報が入ったため、1機は一旦格納庫へ。

この時点で、田辺基地長にも空港がこれほどの津波にやられるという認識はなかったという。大津波警報は出ていたものの、ハザードマップでも高さ3mまでの津波は途中で止まるとされていた。まさかこの空港まで届くことはないだろう。だが午後3時50分過ぎ、相馬沖に出ていた巡視船『まつしま』から10mを超える大津波と遭遇したとの情報が入り、基地でも警戒を強めることになった。

点検のため2名の海上保安官が官用車で滑走路に出たが津波が押し寄せてきた。基地からは無線で慌てて呼び戻す。津波に気づき急いで戻った2名が車を降りて基地に飛び込んだまさしくその時、津波が基地前のエプロンを飲み込んでいった。午後4時過ぎのことだ。

「警戒して海岸線を見ていたんですが、松林を越える粉塵のようなものが見え、その下にザワザワしたものが見えるんです。何なのかと注視しているとだんだん近づいてきて、ひょっとしてこれが津波か？　と思ったと

仙台航空基地田辺哲朗基地長。地震発生時は、まさにこの基地長室でミーティング中だった。

基地から500mも離れた空き地に今も放置されたままのMA869。

津波が基地に押し寄せる様を上空から見て、もうダメかと思いました

地震発生時、訓練中で角田市上空を飛行していたSH176に「大地震が発生した。沿岸部の被害を調査せよ」と基地から連絡が入った。この時点では調査を終えた後に基地に戻る予定だったが、津波は予想を超えて基地に押し寄せた。「津波は壁になってくると思っていましたが、急に水かさが増してきて気づいたときには基地に流れ込んでいました」と語るのは高橋潤飛行士。当初は誰も基地が使用不能になるとは思ってもみなかったという。基地はもうダメかもしれないと思いながら上空から被災の様子を映像で記録したSH176は、「基地には戻らずに安全な高台を探して機長判断で着陸せよ」との指示に従い、岩沼市にある公園に着陸。岩沼消防署で夜を明かし、ヒッチハイクで霞目飛行場へ移動し燃料を確保。無事に機体を霞目飛行場へと移送した。

SH176で飛行中だった高橋潤飛行士、横山健一郎飛行士、そして山田廣市整備士（左から）。

きにはどんどんこっちに。津波は車を流し、そして飛行機も流して押し寄せました」

津波の威力を目の当たりにした田辺基地長は即座に本部に連絡を取る。基地はもうダメだ、応援の飛行機は寄こすな、と。飛行を続けていたSH176にも調査が終わったら適宜、機長判断で高台等に着陸せよと。そしてその間にも基地の周囲は見る間に津波に覆われていった。2階に退避していた職員達もさらに屋上へと避難する。津波の勢いは衰えるどころか、ますます強まっていく。

「流れはさほど早くはないのですがとてつもないエネルギーでした。車も飛行機も、家や厚い鉄板まで流れていきました。これで終わりかもしれない。最悪の場合、屋上に設置されていた鉄塔に何人取り付けるだろうかと考えていました」

流れが落ち着いたところで2階に戻ったが、職員は、まんじりともしないまま寒い一夜を明かすことになった。翌日になっても水位は変わらず、身動き取れない状態に変わりはない。職員1名が手製のイカダで、もう1名が水に浮かぶ瓦礫を乗り越えながら格納庫に向かい、ゴムボートと食料を持って戻ると、そのゴムボートで海上保安学校宮城分校までの往復を繰り返して職員は避難した。避難完了が12日午前10時45分のこと。ここでようやく、直接的な危険は回避できた。

とはいえ庁舎は1階部分がほぼ冠水してしまい基地機能停止。電気、上下水道も使用不能となった。携帯はほとんど繋がらない。1ワットの無線機も通じたり通じなかったり。そしてすぐにバッテリーが弱っていった。チェック中だったヘリコプター3機と格納中だったMA854は冠水・浸水で壁に押し付けられて使用不能。1機は基地から500mも離れたところまで流されていた。そして格納庫の整備用機材も冠水によるサビが発生し使えなくなっていた。

基地周辺の水が引いたのが3月20日。空港の中でも基地周辺は土地が低いこともあって、津波に襲われてから実に9日が経過していた。当面は避難した宮城分校を間借りしつつ、ようやく基地に戻ったのはゴールデンウイーク明けとなった。

波に飲まれ、海水が引いた後も山のような瓦礫と汚泥が残った。他の被災地と同様に気の遠くなるような復旧作業の日々。この時、田辺基地長は職員の士気を懸念していたという。「長いスパンの仕事については考えずに、とりあえず目の前にある仕事をこなして、その日その日に達成感が味わえるように気を配りました。航空機を運用したり、運用調整に当たっている人間はそれなりに達成感もあるのですが、ここで瓦礫を撤去している人間は辛かったと思います。暖房もなかったし食事も毎日同じ物ばかり。いつになったら終わるだろうと考えると挫折しそうになりますよ。それでもひとつひとつ終えるしかないし、マラソンみたいにいつかゴールは来るからと言い聞かせました。本当に先が見えない仕事でした。いや、行方不明者捜索は今も続いています」

現在、情報通信、電話等は従前どおりに復旧している。ただし海水に浸ってサビついた機体の整備機材が使えなくなっている。限られた機材でSH177の機体チェックを進めているが、ほぼ通常の状態に戻るには今年度いっぱい掛かる見込みだ。

トモダチ作戦を支えたビーフボール

被災後、仙台空港復旧のためアメリカの海兵隊が仙台空港に滞在した。いわゆるトモダチ作戦だ。彼らは仙台航空基地の瓦礫撤去も行っており、作業をしていく中で気心も知れ、お互いの食事を交換すると日本のアルファ米に喜んでくれたという。翌日、その海兵隊員はお金を差し出し、「今日はビーフボール（牛丼）を食べたい」と。その後職員は、しばしば海兵隊員のために牛丼やハンバーガーの買い出しに出たという。「こちらは復旧だけでなく捜索や航空機のオペレーションで人手を割かなければならなかったので、海兵隊の人達には大変助けられました。それに荒っぽい作業をするのかなと思っていたら、非常にていねいで配慮のいきとどいた作業をしていただきました」（田辺基地長談）。

捜索は今も続く

波にさらわれ海に消えたたくさんの人々。その多くはまだ発見されていない
「1日も早く、ひとりでも多く、ご家族の元に」と願い、捜索は続けられている

1 漂流物は救命胴衣だったが所有者等を示す記載はなかった。2 入り組んだ地形をくまなく捜索する巡視艇『しまかぜ』3 双眼鏡を使い、海面を見つめ続ける。わずかな漂流物でも見逃さぬように集中を欠かせない。4 津波に流され泥だらけになって発見された海上保安庁マスコット“うーみん”の縫いぐるみ。職員によって泥を落とされ、『しまかぜ』に乗船していた。5 『しまかぜ』の菊池善幸船長（右）以下、5名のクルー。

3

2

1

8月某日、石巻海上保安署所属巡視艇『しまかぜ』が行方不明者の捜索に塩釜港を出た。この日は湾を出て、入り組んだ地形の松島近辺を捜索する予定になっていた。菊池善幸船長以下、5名のクルーは双眼鏡越しに穏やかな海面を注視し、海面の浮遊物をひとつでも見逃すまいと捜索を続けた。

「7月の下旬に、ちょうどこの付近でご遺体を1体発見しているので、今日も同じエリアを捜索します」と説明するのは小野寺嘉哉機関長だ。「潮の流れや天候によりますが、発見が続くこともありますから。それに最近は海水温が上がってきていることや台風で海水が掻き回されたということもあります」

『しまかぜ』は3月に1体、4月に2体、5月に4体、6月に1体、そして7月に6体を発見し収容している。これらは自船で発見した他、通報を受けて捜索し収容した数であり、それ以外にも他の巡視船が発見した遺体を引き取って運んだり、港内の警察の作業を手伝ったりもしており、関わった数はさらに増える。

捜索する遺体は、テトラポッドに引っかかっていたり単独で浮いていたりと状況は様々だが、5月頃まではとにかく海面に浮かぶ瓦礫が作業をより難航させたという。

「漂流物が多くて、どこを進んでも何かにぶつかるという有様でした」菊池船長は当時を思い起こす。

途中、前方に漂流物を発見。注視しつつ進むと3mほどの原木が浮遊していた。まだ新しい様子から最近海に落ちたものと推測されるが、近づいて何か引っかかったりしていないかを確認し先に進んだ。またこの他、角材

や救命胴衣といった浮遊物も発見。救命胴衣は所有者氏名等の記載を確認するため回収し、記録を残す。

「あとは、養殖用の棚に引っかかったりしていることもあるので、漁師さんの船に乗せてもらって捜索や揚収をすることもあります。巡視船では近づけないので」と小野寺機関長。

長期に渡る捜索活動。ひたすら海面を見つめ、終わりが見えない日々。捜索する海上保安官の負担も決して小さくないのでは?

「今は、見つけることができたご遺体に対して、ああ、お盆前にご家族のところにお返しすることができてよかったと、そういう気持ちです。ストレスですか? いや、我々はこれが任務ですし慣れてますから……慣れてるというのも自分としてはうれしくない話ですけれどね。本来この船は、石巻の岸壁についているべき船なんです。それが未だに桟橋が整備されずに塩釜に避難したままの状態が続いている。我々も1時間かけて通い、捜索して、また石巻に帰るという毎日です。それが終わらない限りは何の復旧も復興もされてないということです。毎日、本部から翌日の編成が送られてくるので、それに従って粛々と捜索を続けていきます」

なおこの日、第二管区での捜索作業では3体の遺体が引き上げられている。

間一髪で港を脱出し 難を逃れた『しまかぜ』と『まつしま』

巡視船『まつしま』の高橋亮司航海長（左）と岡田秀明主任航海士。

港に係留されている船は津波に対して無力だ。地震発生直後に大きく潮が引いて船底が海底に触れてしまうと、もう脱出することはできなくなる。石巻保安署にいた菊池船長、小野寺機関長は地震発生直後に巡視艇『しまかぜ』を出港させようと係留岸壁へと向った。港の海面は既に潮が引き始める気配を見せており、通常であれば5名のクルーで出港するところを、船長と機関長の2名だけで緊急出港させた。若手2名は監視取締艇『ぺるせうす』の出港にあたった。港内の漁船や防波堤の人々に「津波が来るぞ」と退避を呼びかけながら自らも港を出て外海に。巨大な津波は「まるで船が坂を登っているよう」だったという。

一方、巡視船『まつしま』は訓練のため福島県の相馬港に錨泊していた。船上でも激しい上下動を伴った只事ならぬ揺れを感じ、すぐに津波が来ることを察知。大急ぎで錨を上げ出港準備を整えた。船が動き出すまでに14分が経過していた。通常、港内を進む際には他の船を配慮し波が立たぬように静かに進むが、このときばかりは全速力で退避した。沖に出ると津波の第一波が目視できた。高さ5メートル。津波に対して垂直に舵を切り、ぶつかるときは速度を落とし、越えた後は加速する。高さ15メートル程度の第二波、第三波と続き、最後の第四波は高さ5メートルだった。この時の動画には、巨大津波に向う『まつしま』の様子が克明に記録されているが、乗組員の対応は冷静だ。「崩れた波に突っ込むのは危険ですが、幸い波は高さはあったが崩れてはいなかった。」と岡田秀明主任航海士は語っている。

5

4

本記事にて紹介した動画は、海上保安庁ホームページ

http://www.kaiho.mlit/go.jp/

にて公開しています。

巡視船のと、巡視艇はまゆきによる貨物検査事案対処訓練
（5月25日・第九管区海上保安本部）

巡視船みずき、巡視艇なつづき、巡視艇あだんによる展示訓練
（6月11日・石垣海上保安部）

巡視艇なつづき、ヘリコプターはまちどり２号の連携による展示訓練
（6月11日・石垣海上保安部）

FLASH

海上保安指導員との合同パトロール
（5月21日・熊本海上保安部）

容儀点検
（5月18日・海上保安学校）

第55回全日本カッター競技大会で海上保安大学校カッターチームが優勝
（5月28日・海上保安大学校）

遠泳訓練
（7月15日・海上保安学校）

屋久島灯台一般公開
（5月15日・鹿児島海上保安部）

巡視船くろせ就役（4月5日・呉海上保安部）

巡視船おきつ解役
（6月3日・清水海上保安部）

職場訪問で救命胴衣の着用を体験する中学生
（6月1日・小樽海上保安部）

NEWS

幼稚園児による海浜清掃（6月2日・釧路航空基地）

第29回海の親子フェスティバルでうみまると記念撮影
（5月15日・敦賀海上保安部）

まいづる田辺城まつりにうみまる、うーみんが参加
（5月22日・第八管区海上保安本部）

佐渡市素浜海岸で小・中学生と漂着物調査
（6月14日・佐渡海上保安署）

体験航海において声援を受ける巡視艇なつづき
（6月11日・石垣海上保安部）

INFORMATION

大切な命！自分で守る

～海上保安庁からのお願い～

マリンレジャーを安全に楽しむために、事前に海の気象情報・安全情報を収集し、
もしもに備えて、自己救命策３つの基本を守りましょう！

自己救命策3つの基本

1

海に落ちても沈まない
ライフジャケットの着用

2

水中でも大丈夫(防水パックの使用)
携帯電話の携行

3

海のもしもは……
118番の活用

海上保安大学校・海上保安学校採用試験

海上保安庁では、当庁の職員の養成機関である海上保安大学校及び海上保安学校の学生を募集しています。
試験は、高等学校等卒業者を対象に行われます。試験の日程については、下記のとおりです。
詳しくは、最寄りの海上保安本部または海上保安庁総務部教育訓練管理官
(☎03-3580-0936)までお気軽にお問い合わせください。

平成23年度 採用試験日程

海上保安大学校

海上保安大学校 学生採用試験

【受付期間】8月25日～9月6日
【第一次試験】10月29日、30日
【海上保安大学校HP】http://www.jcga.ac.jp/

海上保安学校

海上保安学校 学生採用試験

海上保安学校学生採用試験
【受付期間】受付は終了しました。
【第一次試験】9月25日
【海上保安学校HP】http://www.kaiho.mlit.go.jp/school/

学生採用試験HP http://www.kaiho.mlit.go.jp/saiyou/bosyu/index.html

かいほジャーナル47号
平成23年8月31日発行
編集・発行：海上保安庁 政策評価広報室
本誌掲載の写真、イラスト及び記事の無断転載を禁じます。

海上保安庁
JAPAN COAST GUARD
海の「もしも」は118番